幼年童話

床屋さんごっこ（お母さん話）

武田雪夫

さあ、このお話は、床屋さんごっこいふお話ですよ。

今日は、お父さまもお母さまも、朝からお出かけなので、久子さんはお姉さまと二人で、おとなしくお留守居をしてゐました。

お晝まへは、ねえやさんにもお仲間になつてもらつて、お人形さんごっこをしました。それから、おままごともして遊びました。

でも、お晝からは、ねえやさんも、ご用がありますから、こんごは、二人だけで遊びました。クレオンで畫をかいたり、それから、折紙を折つたりして、二人で仲よく遊びました。

そのうちに、二人だけでは、何だか、つまらなくなりました。何か、もつと面白いことはないでせうか。

お姉さまも考へました。それから、久子さんも考へました。

さあ、ほんたうに、面白いことはないでせうか。

そのうちに、お姉さまが、よいことを思ひつきました。

お姉さまは、大きな聲で元氣よく、

「あのね、床屋さんごつこをしませう。さあ、早くあちらへ行きませうよ」。といひました。そして、お姉さまは、ごん〳〵お父さまのお室の方へ入つて行きました。

「さあ、お姉さまが床屋さんで、久子さんがお客さまよ。ですから久子さんは、このお椅子に腰をかけるのよ」。

久子さんは、お姉さまにさう言はれて、そこのお椅子に腰をかけました。その間にお姉さまは、大いそぎで、かけ出して行きました。そして、すぐに白いお風呂敷と、お母さまが、久子さんたちのお洋服を作る時に使ふ大きな鋏を持つて來ました。

お姉さまは、久子さんのお首のまはりに、白いお風呂敷を上手に巻きつけて、大きな鋏を片手に持ちました。そして、久子さんのお髪をチョキ〳〵きる眞似をはじめました。

久子さんは、昨日、床屋さんへ行つたばかりですから

「あら〳〵、お姉さま、ほんとにきつては駄目よ、だめよ」。と言つて、お首をあちらこちらへ振りました。

さうすると、その時、お髪に鋏の先が少しさはりましたから、お姉さまは、うつかり鋏を動かしました。

チョキ〳〵と、耳のところのお髪が、少しきれて、白いシーツの上にパラ〳〵と落ちました。

久子さんは、びつくりして、

「いやよ、いやよ」。といひながら、お椅子から飛び下りて、むかふのお室の方へ、かけて行つてしまひました。そしてお姉さまが、

久子さん、いらつしやいな。もう、ほんたうにきらないから、早くいらつしやいよ。

と、幾度もよんでも、もう久子さんは、どうしても來ません。

お客さまの久子さんに逃げ出されて、お姉さまの床屋さんは、一人ぼつちになりました。それで、床屋さんごつこは、もうおしまひになつてしまひました。

そのうちに、お玄關の呼鈴が、チン〳〵チン〳〵と鳴りました。

おや、どなたでせうね。

お姉さまと久子さんが、ねぇやさんと、しよに出て行つて見ますと、それはお父さまとお母さまがお歸りになつたのでした。

お姉さまと久子さんは、すぐに、

「おかへりなさい」「おかへりなさい」

と、よろこんで言ひました。それから少しして、二人は、お母さまとご一しよにお風呂に入りました。

お母さまは、久子さんのお首やお耳のところを洗ひながら、びつくりしたやうに、

「おや、久子さん、こゝのお髪ごうしました？」とお聞きになりました。

久子さんは、小さな聲でいひました。

「あのね、今日、床屋さんごつこして、お姉さまがきつたのよ」。

すると、お母さまは、

「まあ、明日は、をばさまがいらつしやるといふのに、こんなこころ、變な風にしてしまつて、困りますね。どうしませう」。と言つて、ちよつと考へていらつしやいましたが、すぐに、にこ〳〵しておつしやいました。

「あゝ、さう〳〵、これはよいことがありますよ。明日は、こゝへ大きなおリボンをつけて上げませうね」。

久子さんが、やつと安心して、

「おリボンつけたら、變なこころ、わからなくなるの？」といひますと、お母さまは、

「えゝ〳〵、さうすれば、大丈夫よ」。とおつしやいました。

その時、今までだまつてゐたお姉さまが、頭を下げて、

「お母さま、ほんとにごめんなさい」。と、あやまりました。お母さまは、

「えゝ、もう、こんなことしては、いけませんよ。大きなお鋏は、あぶないのよ」。といつて、にこ〳〵しながら、お姉さまに、お湯をザアと一ぱい、お背中からかけて下さいました。

それでは、これで、このお話はおしまひ。